

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 18 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2010～2013

課題番号：22330186

研究課題名(和文) 保育の場、学校、企業における発達障害に関する理解教育プログラムの開発

研究課題名(英文) Development of a program for understanding developmental disabilities in childcare, schools, and corporations

研究代表者

徳田 克己 (TOKUDA, KATSUMI)

筑波大学・医学医療系・教授

研究者番号：30197868

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 8,600,000円、(間接経費) 2,580,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、幼稚園、小学校、中学校、企業における発達障害に関する理解教育プログラムの開発を目的とする。これまでの実践に欠けていた「何を、どれだけ、どのように理解すべきか」を明らかにするための基礎的な調査を行う。それらの結果をもとに幼児用、小学生用、中学生用、企業内教育用の4種類の発達障害理解教育プログラムを試作し、再度適用・修正という手続きを繰り返して、プログラムを完成させる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to develop a program for understanding developmental disabilities in kindergartens, elementary schools, junior high schools, and corporations. It includes the basic research to clarify "how much of what should be understood in what way", which has been lacking from the practice. Based on the results, we will try making 4 types of educational programs for understanding developmental disabilities for kindergarten students, elementary school students, junior high school students, and corporate education, and complete the programs after repeating the process of adjustment and revision.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：発達障害 障害理解 教育プログラム 保育 小学生 中学生 販売員 幼児

1. 研究開始当初の背景

発達障害のある多くの児童生徒が通常学級で教育を受けるようになってきた。それに伴い、わが国では発達障害理解教育に関する研究が少しずつ行われるようになってきている。しかし、ほとんどは実践研究であり、極端な言い方をすれば「やりました研究」であり、「クラスでこんなことをやったら子どもたちが作文にこのように書いた。これは障害理解に効果的な教育活動だった」という内容である。もちろん、障害理解教育の内容や方法論を構築していくためには、多くの教育実践と評価の積み重ねが必要であるが、現状では、単発的に行われる教育活動の紹介と標準化されていない尺度を用いた評価の結果を紹介しているにすぎない研究が多く、研究の積み重ねの視点に欠けるものが多い。

しかし、海外の研究を含めてみても、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由などの可視的な障害についての理解教育の実践や研究に比べて、発達障害に関する理解教育研究への取り組みは数少ないと言わざるを得ない。

発達障害に関する理解教育研究が少ない第一の理由として、発達障害に関する認識の構造が明らかにされていないことが挙げられる。その構造は、それぞれの集団(幼児、小学生、中学生、成人)ごとに検討されるべきであるが、それらの資料はわが国では皆無である。どの発達段階の者が、発達障害に関してどのような知識や認識を有しているかを確認しておかなければプログラムの内容や方法を作成することは困難である。

2. 研究の目的

本研究は、保育の場、学校(小学校、中学校)、企業における発達障害理解教育プログラムの開発を目的とする。そのために、これまでの実践に欠けていた「何を、どれだけ、どのように理解すべきか」を明らかにするための基礎的な調査(保育者、教員、企業教育担当者を対象)を行い、また本人、保護者、教員を対象にした理解教育に関するニーズ調査を行い、それらの結果をもとに幼児用、小学生用、中学生用、企業内教育用の4種類の発達障害理解教育プログラムを試作し、それを実際に適用して教育心理学的な評価を行い、再度適用・修正という手続きを繰り返して、プログラムを完成させる。具体的には、以下の目的を設定した。

(1) 発達障害児が幼稚園や保育所で起こしやすい問題行動について、幼児がどのように認識するか、また学年による違いはあるのかを明らかにする。

(2) 保育者が発達障害児を周囲の子どもにどのように伝えているのか、また伝える際に何にむずかしさを感じているのかを明らか

にする。

(3) 発達障害児の示す問題行動について、周囲の子どもが保育者にどのようなことを言ってきたのか、保育者はこのような行動を示す障害児に対して周囲の子どもにどのようなニーズがあるかを明らかにする。

(4) 子どもは、発達障害児が示す行動特性について、どのような認識をもっているのか、その認識は発達段階によって異なるのかを明らかにする。

(5) 小学校および中学校の教員は、クラスの子どもたちに発達障害理解指導を行うことについてどのような認識をもっているかを明らかにする。

(6) 成人(百貨店販売員)が発達障害のある人の接客をする際にどのような点にとまどいを感じるのかについて確認する。

(7) 発達障害の特性についての理解を促すことを目的とした発達障害理解教育のモデルを作成する。

(8) 発達障害の特性についての理解を促すことを目的とした授業の実践を行い、その効果を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 発達障害児の行動特性に関する幼児の認識調査においては、幼稚園(2園)および保育所(1か所)に通っている年中児58名(男児30名、女児28名)、年長児62名(男児28名、女児34名)、計120名を調査対象として、個別ヒアリングを行った。調査では、紙芝居を用いて問題行動を起こしている子どもの状況を説明した上で質問をし、絵と文字による選択肢から回答するように促した。

(2) 幼児に対する発達障害の理解指導についての保育者の認識調査においては、幼稚園あるいは保育所に勤務している保育者401名に対して、無記名式の質問紙調査を行った。

(3) 発達障害児の示す問題行動に対する保育者の指導内容の調査においては、幼稚園あるいは保育所に勤務している保育者401名に対して、無記名式の質問紙調査を行った。

(4) 発達障害児の行動特性に関する小学生及び中学生の認識調査においては、2010年2~3月に小学校10校に通う各学年の子ども2196名と、中学校3校に通う中学生(1,2年)871名を対象に、自記式・無記名式の質問紙調査を実施した。質問紙は郵送法を用いて各校に配布、回収した。

(5) 発達障害理解指導に関する小学校教員及び中学校教員の認識調査においては、2011年3~4月に小学校100校の教員1000名を対象に、また同年4~6月に中学校22校の教員264名を対象に、自記式・無記名式の質問紙調査を実施した。質問紙は郵送法を用いて配布、回収を行った。

(6) 一般の人とは異なる行動特徴を示す顧客に対する百貨店販売員の認識ととまどいに関する調査においては、東京都(3店舗)北海道(1店舗)神奈川県(1店舗)にある百貨店(計5店舗)に勤務する販売員958名を調査対象にして質問紙を配布・回収した。回収には留置法を用い、無記名式とした。

(7) 小学生に対する発達障害理解教育のモデル作成と実践においては、A県内の小学校1校の第6学年1クラスに在籍する生徒40名を対象に、2012年2月に、総合的な学習の時間1コマ(45分)を用いて授業の実践を行った。

(8) 中学生に対する発達障害理解教育のモデル作成と実践においては、T県内の中学校1校の第1学年4クラスに在籍する生徒160名を対象に、2012年10月に、総合的な学習の時間1コマ(45分)を用いて、1クラスごとに授業の実践を行った。

4. 研究成果

(1) 発達障害児が幼稚園や保育所で起こしやすい問題行動について、保育者の指示に従わない子どもがクラスにいと想定し、このような行動をする子どもをどの程度、許容できるかを3件法で尋ねたところ、「全然気にしない」と答えた年中児は51%であったのに対して、年長児は18%であった。2検定の結果、1%水準で有意な差が認められ($2(1) = 14.65, p < 0.01$)、年長児の方が許容できない傾向があることを確認した。保育者の指示に従わない子どもをどのように思うかを尋ねたところ、年中児も年長児も「その子どもが保育者の指示に従わないと保育者が困る」と答えた者が最も多く、年長児の方が有意に高い傾向がみられた(年中児:33%、年長児:47%; $2(1) = 2.45, p < 0.10$)。加えて、「保育者の指示は聞くべきである」を選択した割合は、年中児よりも年長児の方が有意に高かった(年中児:17%、年長児:4%; $2(1) = 4.33, p < 0.05$)。

こだわり行動を示す子どもへの許容に関しては、「全然気にしない」は年中児45%、年長児24%、「絶対にいやだ」は年中児7%、年長児16%であり、年長児の方が許容できない傾向があった。また、そのような行動のある子どもについて、「自分も友だちに貸したくないと感じる経験があり、その子どもに同感できる」と回答した割合は年中児の方が有意に高かった(年中児:43%、年長児:18%; $2(1) = 9.18, p < 0.01$)。

パニックを起こす子どもへの許容度については、「全然気にしない」と答えた年長児は31%であり、「保育者の指示に従わない子ども」(年長児:18%)や「こだわり行動のある子ども」(年長児:24%)よりも許容している割合が高かった。

(2) 保育者が発達障害児を周囲の子どもにどのように伝えているのか、また伝える際に何にむずかしさを感じているのかに関しては、これまでに担当クラスの発達障害児の特性や接し方について、周囲の子どもに話をしたことがある保育者は30%(122名)であり、説明しようと考えた理由としては、「周囲の子どもから、障害児の行動について質問されたから」と答えた者が最も多く(62%)、「障害児がクラスになじめるようにしたかったから」(38%)、「障害児にクラスの子もたちが世話を焼きすぎようになったから」(36%)が次いだ。

(3) 「友だちに手を出す」「指示に従わない」「パニックを起こす」「こだわりがある」行動を示す子どもを担当したことがある保育者を対象に、その子どもについて周囲の子どもから保育者がどのようなことを言われたのかを尋ねたところ、「友だちに手を出す」「指示に従わない」「こだわりがある」行動を示す子どもに対しては、保育者に障害児の行動を報告する子どもが多かった。また、「友だちに手を出す」子どもに対しては、その他の行動を示す子どもに比べて「遊びたくない」という訴えを保育者にする周囲児が多かった。一方、「指示に従わない」「パニックを起こす」「こだわりがある」子どもについては、その子どもの行動の理由を保育者に尋ねようとしていたが、「友だちに手を出す」子どもには理由を尋ねる周囲児は少なかった。

(4) 発達障害児の苦手なこととして、微細運動の不器用さ(はさみを上手に使えない)と、読字困難(本を読むのに時間がかかる)の例を挙げ、そのような状態にある人についてどう思うかを尋ねたところ、はさみを上手に使えない人について「もっと練習した方がよい」と答えた者は、いずれにおいても小学校低学年児に有意に多く(小学1,2年62%、小学3,4年52%、小学5,6年35%、中学1,2年30%)、年齢が上がるにつれて「そのままよい」「うまくできたほうがよいが、仕方がない」と考える者が増えた($2(6) = 180.02, p < 0.01$)。本を読むのに時間がかかる人についても同様に、年齢が上がるにつれて「時間がかかってよい」と答える者が増える傾向が認められた($2(6) = 234.24, p < 0.01$)。

発達障害児にしばしば見られる行動上の問題として、授業時に離席をして歩き回る行為、整理整頓できずプリントを頻繁に失くす行為を例示し、そのような人がクラスにいた場合の対応を尋ねた。いずれも「注意をする」と答えた子どもは低学年に有意に多く(授業中の離席:小学1,2年72%、中学生31%、紛失行為:小学1,2年52%、中学生14%)、年齢が上がるほど「気にしない」と答える傾向にあった。

(5) 発達障害児の担任経験がある者は小学

校、中学校のいずれも8割を超えた。発達障害児について他児が理解する必要性をどのような時に感じるかについては、クラス内で発達障害児への無視や攻撃が始まった時(小学校73%, 中学校75%)と回答した者が多かった。また、発達障害児について他児に話す際に感じる難しさについて、小学校では障害のある本人が傷つく可能性や子どもたちが説明を受けても理解できない可能性などが、中学校では障害のある本人が傷つく可能性や説明をきっかけに中傷やいじめが起きる可能性が挙げられた。

(6) 発達障害のある人が百貨店内でしばしば示す行動13項目を提示し(ここでは発達障害があることは明示しない)そのような行動をする人への接客の経験があるかどうかを尋ねた。その結果、「ささいなことに非常にこだわる」(86%)、「店員の話をかきず、一方的に自分の話だけをする」(85%)、「買いたい商品をなかなか決められない」(85%)、「何度も同じ質問をする」(78%)、「話が本題からどんどんそれてしまう」(66%)などの行動をする人に対する接客経験のある者が多いことが明らかになった。これらの行動をする人を接客することについてどの程度、とまどいがあるかを「非常にとまどう」から「全くとまどわない」までの5件法で尋ねた。なお、「非常にとまどう」を5点、「全くとまどわない」を1点として平均値を算出した(表1)。その結果、どの年代の者も「突然大きな声を出したり、奇声をあげたりする」「お金を支払わずに商品を持って行ってしまう」「ささいなことで怒り出す」「店内を走り回る」などの行動に対してとまどいを感じるということがわかった。また、年代の若い者の方がより強くとまどいを感じるということが確認できた。

(7) 小学生に対する授業は、導入と3つの展開、まとめて構成された。展開1では、黒板をひっかく音、脇の下をくすぐられること、歯医者機械音のそれぞれを嫌だと感じる程度について、10段階に区切った線分に印をつけていき、そのばらつきを見ることで、ひとの感覚が個人によって異なることへの気づきを促した。その上で、一部の感覚がとても敏感であるために「雨が痛い」「ざわざわした場所はとてもうさくて苦手」などと感じる人がいることを伝えた。

展開2では、いろいろな情報が含まれていて必要な情報を探すのに時間がかかる絵と、情報が整理されている絵を示しながら、頭の中で情報を整理するのが得意な人もいれば苦手な人もいることを伝えた。この時には、多くの情報が一度に頭の中に入ってくる人は、一つの情報を取り出すことは苦手でも、他の人が気づかなかったことに気づくことができるという説明を加えた。

展開3では、うしろから触られることを「とても嫌」と感じる人と呼ぶときにはどうしたらよいかといった支援の内容や方法について、子どもと考へた。最後に、苦手なことがあってもできることは多くあり、自分なりに工夫をして生活をしている人たちの様子を話して聞かせた。

(8) 中学生に対する授業は、発達障害児の痛覚や聴覚の過敏・鈍麻に関する理解を促すことをねらい、導入と5つの展開、まとめて構成された。展開1では、暑がりの人や寒がりの人などがいることを例に挙げ、人は経験を通して感覚に個人差があるという知識を得ていることを確認した。次に、聴覚や痛覚が人によって異なると思うかどうかを生徒に尋ねることで、これらの感覚については個人差が大きくあることへの気づきを促した。

展開2では、黒板をひっかく音、脇の下をくすぐられることがどの程度苦手であるかについて、10段階に区切った線分に生徒一人ひとりがつけた印のばらつきを見ることで、ひとの感覚が予想以上に多様であることへの気づきを促した。また、展開3において、聴覚や皮膚感覚が過敏であったり鈍感であったりする人の事例を紹介した。

展開4では、苦手な感覚に慣れるまでには時間がかかる場合があること、なかには慣れることのできない感覚があることを伝え、展開5では、自分とは大きく異なる感覚をもつ他者をどうとらえるべきか、どのように付き合うべきかについて生徒と考へた。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計4件)

水野智美、徳田克己、身体障害、発達障害の理解教育の段階モデルの提案、障害理解研究、15巻、2014、印刷中、査読有

西館有沙、徳田克己、子どもの発達障害理解を促す授業の実践 - 自閉症スペクトラムにみられる「コミュニケーション上の困難」を知る取り組み -、障害理解研究、15巻、2014、印刷中、査読有

NISHIDATE A. & TOKUDA K., Pedagogical Practice to Promote Understanding of Developmental Disability among Junior High School Students: Through Case Studies of Individuals with Paresthesia, The Asian Journal of Disable Sociology, 13, 2013, 1-16, 査読有

水野智美、西館有沙、徳田克己、発達障害に関する幼児の認識、障害理解研究、14巻、2012、1-10、査読有

[学会発表](計14件)

水野智美、保育の場における発達障害に

関する理解教育 3 - 発達障害児の示す問題行動に対する周囲児の発言と保育者の指導内容を中心に -、日本乳幼児教育学会、2013年11月24日、千葉大学、千葉市

西館有沙、発達障害理解指導に関する小学校教員の認識 2、日本心理学会、2013年9月21日、札幌コンベンションセンター、札幌市

水野智美、発達障害のある幼児が示す問題行動への保育者の対応 - 専門家による適切性の判断を中心に -、日本心理学会、2013年9月19日、札幌コンベンションセンター、札幌市

西館有沙、発達障害理解指導に関する中学校教員の認識 2 - 発達障害児への教員の対応とクラスメートの理解促進に関する教員の考え -、アジア子ども支援学会、2013年9月15日、ノーホークホテル、ベトナム、ホーチミン

水野智美、保育の場における発達障害に関する理解指導 2 - 友だちに手を出す子どもに関する理解指導を中心に -、日本障害理解学会、2012年11月10日、富山大学、富山市

西館有沙、発達障害理解指導に関する中学校教員の認識 1、日本障害理解学会、2012年11月10日、富山大学、富山市

水野智美、保育の場における発達障害に関する理解指導 1 - 保育者は発達障害のある子どもについて周囲の子どもたちにどのように伝えているか -、日本特殊教育学会、2012年9月28日、つくば国際会議場、つくば市

西館有沙、発達障害理解指導に関する小学校教員の認識 1、日本心理学会、2012年9月13日、専修大学、川崎市

水野智美、発達障害の子どもに関する理解教育を進めるには、アジア障害社会学会韓国例会、2012年1月3日、全南大学校、麗水市、韓国

西館有沙、発達障害に関する小学生の認識 2、日本障害理解学会、2011年11月12日、筑波大学、つくば市

西館有沙、発達障害に関する小学生の認識 1、日本公衆衛生学会、2011年10月20日、秋田県民会館、秋田市

水野智美、発達障害に関する成人の認識 - 一般の人とは異なる行動特徴を示す顧客に対する百貨店販売員のとまどいを中心に -、日本特殊教育学会、2011年9月23日、弘前大学、弘前市

西館有沙、発達障害に関する中学生の認識、日本心理学会、2011年9月16日、日本大学、東京都

水野智美、発達障害に関する幼児の認識 - 発達障害児がしばしば示す問題行動に

関する認識を中心に、日本教育心理学会、2011年7月25日、かでの2.7、札幌市

6. 研究組織

(1) 研究代表者

徳田 克己 (TOKUDA, KATSUMI)

筑波大学・医学医療系・教授

研究者番号：30197868

(2) 研究分担者

水野 智美 (MIZUNO, TOMOMI)

筑波大学・医学医療系・准教授

研究者番号：90330696

西館 有沙 (NISHIDATE, ARISA)

富山大学・人間発達科学部・准教授

研究者番号：20447650